

4章

アクティブ・ラーニング

1 アクティブ・ラーニング（「主体的・対話的な深い学び」）

近年、子どもの主体的な学びや協働的な学びの必要性が増している。単なる知識・技能の習得にとどまらず、「知っている・できることをどう使うか」を経て、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」まで考えを深めることが大切である。（注1）

それゆえ、「何を学ぶか」という知識・技能の習得は、初期の第一段階である。習得した知識・技能が生きて働く力に発展するには、「どのように学ぶか」という視点が大切である。

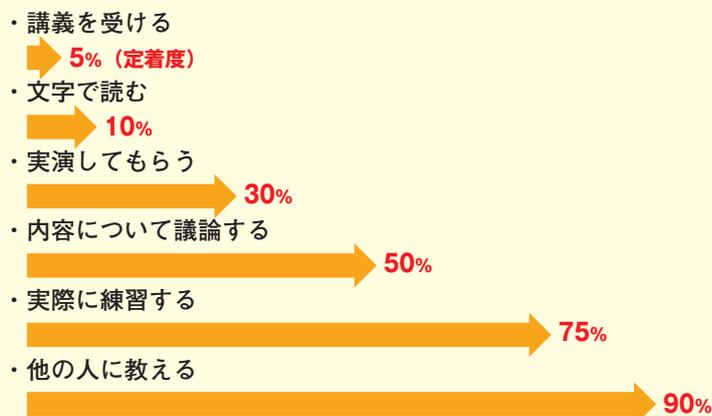
その過程の活動であるアクティブ・ラーニングは、「主体的・対話的な深い学び」である。具体的には、学ぶことに興味・関心を高めた生徒同士の学び合いが基本である。代表的な活動は、問題を探し、仲間との学び合いによって解決を図る問題解決的な学習がこれにあたる。「対話的な学び」を行うことにより、異なる視点から自己の考えを広げ、深めることができる。その中で、なぜその活動が必要なのかという目的や意義を理解して「深い学び」が実現することにより、実際に生きて働く力となる。

主体的・対話的に深く学ぶ中で、質の高い理解が得られることにより、生徒が自ら考え、互いに深め合いながら課題を解決できる真の学力となる。自分達の力で獲得した力は、定着度も高まり、かつ実社会で活用できる汎用性の高い能力となる。

<求められる形>

- 何を知っているか、何ができるか
- 知っていること、できることをどう使えるか
- その上で、どのように社会と関わり、よりよい人生を送るか

○主体的に学ぶことで定着度は高まる



アメリカ国立訓練研究所 (NTL)

受動 → 能動 = 主体的能力の伸長

前頁の図の通り、「聞いているだけ」「読むだけ」という受動的な状態で取り入れた知識や技能の定着度は高くない。しかし、能動的な活動を組み込むことで、定着度は飛躍的に増大する。それゆえ、生徒が自ら進んで活動する場面を意図的に盛り込んだ指導計画を作成することが、学びの質の向上に直結する。

<求められる学び>

○主体的な学び

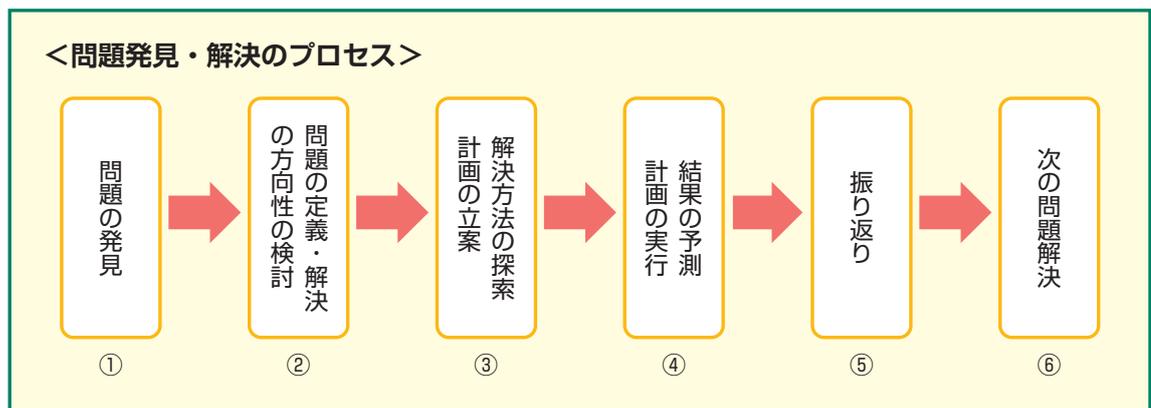
子ども達が見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を次に発展させられる学習活動

○対話的な学び

他者との話し合いや活動を通して、自らの考えを広げ深める対話的な活動

<武道単元（柔道）で求められる「主体的な学び」>

小学校では、柔道の前段階となる基礎的な運動を行っていない。このため、中学校で初めて柔道に接する多くの生徒にとって、柔道特有の動作や技の習得は容易ではない。基本的な技能習得さえ難しいのであるから、柔道分野で主体的な学びを行うには周到かつ綿密な準備が必要である。最初から完全な問題解決学習を行うことは難しい。



上図の学習の流れで言えば、何が問題で、どの観点をどのように検討すれば解決の方向性が明らかになるかという討議の要点を、中学生の初心者が見付けることは難しい。そこで、初期段階では、教員が①～③の部分の予め提示し、学習の進め方と要点を明らかにした上で、④以降の学習を行うことが円滑な学習につながっていく。

そこで得られた解答は、単なる講義形式の教え込みと内容的には同じである。しかし、解答に至る思考過程で、意義や必要性を理解できているため、その後の実際の活動の中で活用できる生きて働く知識や技能となる。



2 指導の具体例

(1) 受け身の正しい手のたたき方

「受け身の手のたたき方を考えよう」

○指導のねらい

受け身の際の正しい手のたたき方について、動作の意味を理解する中で生徒同士で正しい動作を導き出すことにより、効果的な技能習得を図る。

○指導時期

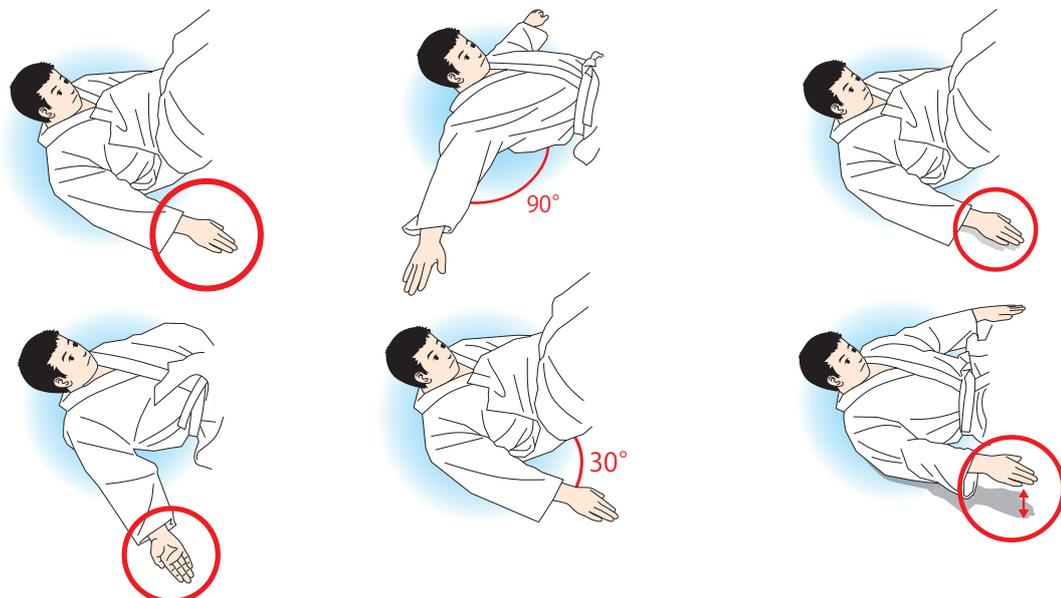
基礎知識、基本動作の指導が終わり、受け身の指導を始める時期に行う。

○指導の流れ

- ① 3～4人の小グループ編成。
- ② 受け身の際、正しく手をたたくことの重要性を伝える。
 - ・ 衝撃を和らげる効果
 - ・ 頭部を畳につかないようにあごを引く動作のタイミングをとる契機
- ③ グループでの話し合いのポイントを提示する。

- ・ 手の向き（手の平でたたくか、手の甲でたたくか）
助言「どちらの方が痛くないか」
- ・ 腕の開き具合（体側からどの位の角度でたたくか）
助言「どの角度が一番強くたたけるか」
- ・ 叩き方（たたいて畳につけたままか、たたいて跳ね上げるように離すか）
助言「どちらの方が痛くないか」

- ④ 実際に動作しながら生徒同士で考えさせる。
- ⑤ 全体を注目させ、ポイントについての各グループの検討結果を発表させる。
- ⑥ たたき方の正しい体勢とその理由をまとめさせる。



○指導の要点

何の手がかりもないままに、生徒に課題追究を課しても、効果的な話し合い活動は期待できない。何について話し合いを深めていいかわからない生徒に「自由に話してごらん」と言うのは、指導放棄と変わらない。

初期段階では、課題から一段階思考の桁を具体的に落とした話し合いのポイント（前ページ③参照）を提示することで、容易に答えを導き出すことができる。専門性をもたない生徒が判断できる「AかBか」的な視点が大切である。「どうすればよいか」的な視点だけでは、考えを深めることはできない。

(2) 大腰の正しい姿勢

「大腰で相手を腰に乗せる時の体勢を考えよう」

○指導のねらい

大腰で相手を腰に乗せた時に正しい姿勢について、動作の意味を理解する中で生徒同士で正しい動作を導き出すことにより、効果的な技能習得を図る。

○指導時期

投げ技で大腰の指導を始める時期に行う。

○指導の流れ

- ① 3～4人の小グループ編成。
- ② 大腰をかける際、正しい姿勢で相手を腰に乗せることの重要性を伝える。
 - ・ ふらつかない安定した姿勢で安全性を確保
 - ・ 相手の体重を負担に感じることなく、効果的に技をかける体勢の習得
- ③ グループでの話し合いのポイントを提示する。

- ・ 足の開き具合（狭い方がいいか、大きく開いた方がいいか）
- ・ 腰の高さ（自分の腰を相手より低くするか、高くするか）
- ・ 上体の寝かせ具合（上体を直立して乗せるか、寝かせて乗せるか）

- ④ 実際に3つのポイントを動作しながら、生徒同士で考えさせる。
- ⑤ 全体を注目させ、ポイントについての各グループの検討結果を発表させる。
- ⑥ 大腰の正しい体勢とその理由をまとめさせる。



(3) 技の連絡

ジグソー法（注2）で「膝車からの連絡技を考えよう」

○指導のねらい

相手の動きに応じた連絡技を考える際、ジグソー法を活用して小グループで検討することにより、主体的に学ぶ力と態度を身に付ける。

○指導時期

数種類の投げ技を習得した段階で、約束練習を経て自由練習に移行する時期に行う。

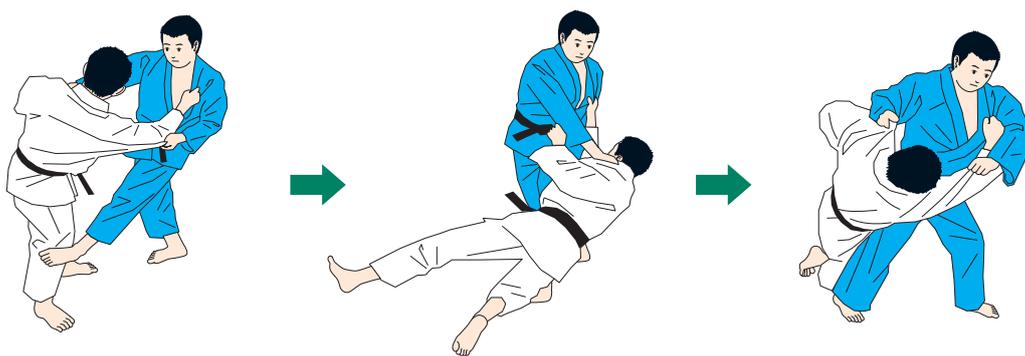
○指導の流れ

- ①通常の2人組のペアを組み合わせて、4人組を作る。
- ②追究する課題を提示する。

【膝車をかけて相手がA～Dに動いたら、次にどんな技をかければよいか】

- A：前に動いた（崩れた）時
- B：後ろに動いた（投げられまいと踏ん張った）時
- C：右に動いた時
- D：左に動いた時

- ③4人組の中で、追究する課題（A～D）を分担する。
- ④課題（A～D）別に集合し、その中で3～4人の小グループを作る。
- ⑤小グループごとにどんな技が効果的か検討する。
- ⑥検討が終わったら、元の4人組に戻る。
- ⑦各自が検討した課題を発表し合い、追究成果を共有する。
- ⑧成果を基に、膝車をかけた時に相手の動きに応じて次の技を繰り出す約束練習を行う。



3 評価

関心・意欲・態度	思考・判断
<ul style="list-style-type: none"> ・意欲を持って積極的に話し合いに取り組むことができる。 ・相手を尊重して分担した役割を果たすことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・正しい技を身に付けるためのポイントを見付けることができる。 ・仲間と協力する場面で、協力の仕方を見付けることができる。

注1

○新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実

- ・生きて働く「知識・技能」の習得
- ・未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」の育成
- ・学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養

『文部科学省 学習指導要領改訂の方向性（案）』より抜粋

注2

○ジグソー法

グループ内の各個人に、それぞれ異なる追究課題を分担する。次にグループを解体して追究する課題ごとに新たなグループを作り、課題を追究する活動を行う。課題が追究できたら、最初のグループに戻り、各自が追究してきた成果を披露し合い、成果を共有する。

各自の役割と責任が明確なことで、活動への意欲が高まるとともに、話し合い活動等によって思考力、表現力を高めながら協働意識を育成することができる。